東洋的静寂と老荘思想への志向（「森鷗外と夏目漱石の俳句」(2)）

――漱石の句――

大星光史

病中の句

明治四十三年十月からその翌年の二月二十日までにかけて朝日新聞に連載された『思ひ出す事など』の中で、漱石は俳句、漢詩について次のような述懐をしている。

当時、六月に胃潰瘍で長年胃腸病院に入院。退院後、八月六日療養のため修善寺温泉へ行き、こゝで大吐血、一時危篤状態に陥って再度、長与病院に入院した頃である。ときに四十四歳である。

修善寺に居る間は仰向に寝たまゝよく俳句を作つては、それは日記の中に記け込んだ。時々は面倒な平仄を合して漢詩さへ作つて見た。（略）

余は年来俳句に疎くなりまさつた者である。漢詩に至つては、殆んど当初からの門外漢と云つても可い。詩にせよ句にせよ、病中に出来上がつたものが、病中の本人にはどれ程得意であつても、それが専門家の眼に整つて（ことに現代的に整つて）映るとは無論思はない。

けれども余が病中に作り得た俳句と漢詩の価値は、余自身から云ふと、全く其出来不出来に関係しないのである。（略）

所が病気をすると大分趣が違つて来る。病気の時には自分が一歩現実の世を離れた気になる。他も自分を一歩社会から遠ざかつた様に大目に見て呉れる。此方には一人前働かなくても済むといふ安心が出来、向ふにも一人前として取り扱ふのが気の毒だといふ遠

慮がある。さうして健康の時にはとても望めない長閑かな春が其間から湧いて出る。此安らかな心が即ちわが句、わが詩である。従つて、出来栄の如何は先づ惜いて、出来たものを太平の記念と見る当人にはそれがどの位貴いか分らない。病中に得た句と詩は、退屈を紛らすため、閑に強いられた仕事ではない。実生活の圧迫を逃れたわが心が、本来の自由に跳ね返つて、むつちりとした余裕を得た時、油然と漲ぎり浮かんだ天来の彩紋である。

健康時には、日夜にわたる生存競争のためついつい心ならずも捲き込まれ、また俗塵に堪え得ると自他ともに許されるときには、がむしゃらに、突っ走ってゆく。

この場合に作った句、漢詩には、「間隙」「鬼の影」があるような気がしてならない。句と詩に狂し、翻弄される場合も多い。しかし、病中につくる句、これには実生活の圧迫を逃れ出たわが心による「本来の自由」「天来の彩紋」があるという。

吾ともなく起る「興」、はっきりとした「創造」、これを感じさせ漱石を喜ばせる。

当時の幾つかの句を挙げてみる。

秋の江に打ち込む杭の響かな

秋の空浅黄に澄めり杉の斧

別るゝや夢一筋の天の川

死の淵をさまよった後、生き返り、十日程してふと出来たのが最初の句であるという。澄みわたった秋空に打ち込む川の杭の音。それは蘇生した漱石の心にすがくしくも響いたに違いない。

二句目も同じ様な感興であり、浅黄に澄んだ杉の斧の冴えは、俗塵を離れた境地でもある。

最後の句は、松根東洋城と別れる折の連想が一句となり、恍惚、夢の中の句の状態でできたのがこれであるという。

作者自身もその句意を解し難いという。しかし、現実、社会から遠ざかった天来の彩紋の句であることはたしかである。

その他にこんな句もある。

風に聞け何れか先に散る木の葉

萩に置く露の重きに病む身かな

露けさの里にて静なる病

腸に春滴るや粥の味

豪雨による崖崩れで森田草平の家が潰れた。しかし幸いに草平は無事であった。愛弟子の災難を知らずに、遠い温泉地で雲と煙雨の中、漱石の病状は悪化、死の危険さえあった。その時の句が最初のものである。自己の予測される死をも客観化し得る。それが、漱石の当時の句である。「焚く程に風がもてくる落葉かな」といった良寛をはじめとする宗教家、超俗の俳人に近い心境が漱石を支配していたものであろう。

何時その一命を失うのか知れぬ危うさ。そこに身を置く重病の自らを、萩に置く露と譬え初秋の空に散る木の葉と眺める。

「斯く凡ての人に十の九迄見放された真中に、何事も知らぬ余は、曠野に捨てられた赤子の如く、ぽかんとして居た。苦痛なき生は余に向つて何等の煩悶をも与へなかつた。余は寝ながらたゞ苦痛なく生きて居るといふ事実を認める丈であつた。さうして此事実が、はからざる病のために、周囲の人の丁重な保護を受けて、健康な時に比べると、一歩浮世の風の当り悪い安全な地に移つて来た様に感じた。実際余の妻とは、生存競争の辛い空気が、直に通はない山の底に住んでゐたのである。」と。

そして、第三句目が出来る。

明日消えるやも知れぬ〝露〟、その露けさこそ、もっとも生死を超えた彼岸の静寂。漱石が求めて止まなかった詩境のひとつである。

最後の句は、そんな境にある漱石の好句ではなかろうか。実にいい句である。

無の境涯からついぞ口をついて出る春の爛漫たる無為の滴りの一句である。

晩年の漱石は、原稿書き、小説書きに疲れると、一篇の漢詩をつくり、その内にえも言われぬ清涼の気を養ったと、知人への手紙に述べている。

小説は、人間の俗事、業の世界を極めてのものであり、俳句、漢詩にはそれがない。

小説を書くとき、世俗の鬼と化さざるを得ぬ漱石にとって、俳句、漢詩の短文学、淡白な詩境は、救いであり、彼が抱く理想郷に遊ぶ唯一の好機でもあった。

三

子規との交友

漱石の最も初期の頃の句と思われるものは明治二十三年五月十三日付、正岡子規宛の書簡の中にみられる。

帰ろふと泣かずに笑へ時鳥

聞かふとて誰も待たぬに時鳥

子規の喀血を見舞ってのものである。

「僕の家兄も今日吐血して病床にあり斯く時鳥が多くてはさすが風流の某も閉口の外なし呵々」と書簡末尾にしるす。

時鳥は血を吐くかの如く裂帛鋭く啼くゆえに、それに掛けて、兄にしろ、友人子規にしろ漱石の周辺にこのように時鳥に似た病人が多くてはさすがに風流をもって任ずる我が輩も閉口であり、お手上げだと駄洒落を言ってみたものである。

子規の本名は常規であり、「子規」の号はこの喀血を機会に、〝ほととぎす〟すなわち〝子規〟を当てたものである。

勿論、この二句にはさしたる句としてのよさはない。たゞあえていえば、漱石二十一歳のころであり、また子規が、日本派の俳人として旗上げするまでにはかなり以前の頃の句である。

なお、子規と漱石の交友は、東京大学在学中からになる。

子規はどちらかといえば親分肌の、自分が大将で居なければその場がおさまらぬといった型（タイプ）である。

漱石とどうしてうまくいったかといえば、そういうことが気にならない漱石の性格によったかと思われる。

同じ年齢でありながら、子規はいつも兄貴分でなければ気がすまぬ。無い金をたたいて西洋料理を奢ったりする。政治家が志望で占いなどもする。

俳句も子規を通じ漱石もつくるようになった。ともかく早熟で、むやみと哲学めいたことばを振廻していたのが当時の子規である。

かつて、漱石が『坊ちゃん』で名高い松山中学の教師となって赴任していた頃、結核の子規が無一文で転がり込んで来た。家主は菌の感染を恐れて消極的だったが漱石は、この友人に部屋を与えた。すると、子規のところへは、松山中の俳句をやる門下生がぞくぞくと集まり、漱石が学校から帰っても毎日のように多勢来て、本を読むことも何もできない。とにかく自分の時間というものが無い。止むを得ず俳句を作ったという。

子規は、蒲焼きが大好きで、相談もなく自分で勝手に取り寄せ、つけは全部漱石の方へ廻す。東京へ戻るときは、下宿料はすべて「君払ってくれ給え」といい、金を十円ほど貸せといって上京した。こんな関係が漱石との間柄である。

子規が血を吐いて〝子規〟の号を用いたのは、明治二十二年五月十日のことであり、従って先の二句は、その号に因んでの三日後の漱石の句である。二人の親交はその年の正月結ばれている。

漱石の雅号は、「枕流漱石」の熟語からのものであるが、同じ年の五月末より用いられたかと考えられる。

二十七日付の子規宛に「七草集には流石の某も実名を曝すは恐レビデゲスと少しく通がりて当座の間に合せに漱石となんとしたり顔に認め待り後に考ふれば漱石とは書かで漱石と書きし様に覚へ候云々」の追白が見える。

ともあれこの頃は、子規、漱石ともに、俳人、文人としての自覚をまがりなりにも意識しだした頃かとも取れる。

翌年二十三年の句に、

西行も笠ぬいで見る富士の山
寝てくらす人もありけり夢の世に
峯の雲落ちて筧に水の音
東風吹くや山一ぱいの雲の影
白雲や山又山を這ひ回り

の五句がみられる。

いずれも子規宛の手紙にそえられたものであり、あとの三句は、子規の添削がある。

三句の「筧に水の音」の原句は「声あり筧水」であり、五句の「白雲や」は「雲の影」であった。

ともあれ漱石が、松山中学教諭として赴任したのは、明治二十八年四月の二十九歳の年であり、この頃子規の影響もあって、句作に専念、俳壇にも次第に顔を出してくる。

凩に裸で御はす仁王哉
御手洗や去ればここにも石蕗の花
黄菊白菊酒中の天地貧ならず

五

憂ひあらば此酒に醉へ菊の主

煩悩は百八減つて今朝の春

不立文字白梅一本咲きにけり

禅寺や丹田からき納豆汁

六句の「白梅一木咲きにけり」の原句は、「梅咲く頃の禅坊主」である。十月の末、子規に送って、添削されての句である。原句より見事に生き返った句となったことを知る。

三、四の句には、神仙、老荘の雰囲気を感ずるし、六、七の句は、勿論、禅に関しての句である。

禅的東洋的なものへ

前年の二十八歳のとき、漱石は肺病でないかとの疑いで療養につとめた。八月は、松島に遊び、瑞巌寺に詣で、十二月には、鎌倉円覚寺で釈宗演を師として参禅をしている。

『門』をはじめとする諸作品でその経験は語られてゆくことになるが、少なくとも不立文字禅的なものに憧れたことは確かである。

漱石の性格は、自らも述べているように同じ仏教でも他力のものより自力のものを好む傾向があった。しかし、この禅に関しては明らかに失敗であり、参禅という体行により悟入することは遂に不可能だったようである。坐を組めば組むほど迷いが生じ、ついに『門』前払い、山門を目の前にして内に入ることを得ぬ自分を自覚する。至難の業である。

禅定の僧を囲んで鳴く蚊かな（明治二十九年）

涼しさや奈良の大仏腹の中　（同年）

雛僧の只風呂吹と答へけり　（明治三十二年）

禅僧に旛（はた）動きけり春の風　（同年）

静坐聴くは虚堂に春の雨の音（大正三年）

いずれも禅的境地、禅僧を詠んでのものである。

三句は、前書きに「巌端に廊あり藁を積むこと丈余雛僧一人其端に坐して凩の吹くたびに千丈の崖下に落ちんとする其居の危きを告ぐるに平然として曰くいのちは一つぢやあきらめて居りまするとと忽然鳥巣和尚の故事を憶起して」とある。

壮絶な禅的な生き方、その修行が漱石のこころを掴むかに見えたこともあった。

この頃、彼は漢詩をつくりはじめており、鏡子夫人のひどい悪阻の苦しみと同時に、漱石自身も神経衰弱に悩んでいた時分である。

修行実践では到底開悟できそうもない禅の世界だけに、漱石には、それだけ一層、禅的なもの・東洋的静寂感に憧れるものがあったかと想像される。それがこの句の世界であり、漢詩による代償行為だったともいえる。

可能でなかった体行の代りに、漱石はその思想、文筆で、詩（ポエム）の内でこの東洋的真髄に迫ろうとした。

漱石にはもと〳〵漢詩の素養があり、むしろ英文学者であるよりも、漢詩、漢文に親しむ方がより安心できる日本人的特質を十分持ち合わせていた。

個人主義のヨーロッパ直輸入の思想に悩まされぬいた漱石が、やがて則天去私の東洋的思想の中で安心の境を得たことも決して偶然ではないといえる。

「黄菊白菊酒中の天地貧ならず」「憂ひあらば此酒に醉へ菊の主」などその意味で、これらの心境に近づいてゆく句である。

うき世いかに坊主となりて昼寝する（明治二十九年）

菊咲いて通る路はなく逢はざりき　（同年）

空に一片秋の雲行く見る一人　（同年）

秋高し吾白雲に乗らんと思ふ　（同年）

寒山か拾得か蜂に螫されしは　（明治三十年）

最初の二句は「訪隠者」の題詞がある。

三句以降の雲、白雲、寒山拾得ともどもに隠栖の詩境に関与しての内容である。もちろん最後の句は、ユーモア滑稽味を主としたものではあるが。

世俗に我れは関せずと昼寝する坊主。咲き乱れる菊の中についい足を踏み入れることが出来ず訪問し損ねた隠仙の庵。一片の雲、その白雲に乗る人。それはすでに俗事を超脱し、詩と自在の境に遊ぶ神仙のこころである。

七

『めさまし草』（明治二十九年三月号）に載せた漱石の「神仙体」十句がある。

春の夜の琵琶聞えけり天女の祠
路も無し綺樓傑閣梅の花
屋の棟や春風鳴って白羽の矢
蛤やをり〳〵見ゆる梅の城
霞たって朱ぬりの橋の消えにけり
どこやらで我名よぶなり春の山
大空や霞の中の鯨波の声
行春や瓊觴山を流れ出る
神の住む春山白き雲を吐く
催馬楽や縹緲として島一つ

琵琶と梅。春風、霞、春の山。白雲縹緲たる神仙の世界は、『草枕』の作品内容ではないが、漱石が夢みる世俗を超えた芸術、桃源郷でもあったに違いない。

漱石はかって、大学在学中に『英国詩人の天地山川に対する観念』を書いて「哲学雑誌」に連載した。

その前半には、『ウォルト・ホイットマンの詩について』（十月）を同様に同誌に載せた。自然詩人ワーズ・ワース・ホイットマンは若き漱石のこころをとらえるものがあった。『老子の哲学』（六月）もこれ以前の同じ年に文科大学東洋哲学論文として書いている。老子の哲学についてはかなり批判的であるが、この頃の研究・論文が後年、論や思想としてよりも東洋の思想への内的志向・詩的憧憬として実を結んでいったかと思われる。

老荘「愚」「無」の世界

世をあげて近代社会構築へ向けての明治の人工・人為の世相から、漱石は次第に自然、あるがままの世界へ惹かれていく。いわば、西

欧的自我のない東洋的、〝無〟への没入である。

無人島の天子とならば涼しかろ（明治三十七年）

独り裸で据風呂を焚く（明治三十七年）

いずれも虚子庵で七月つくったもので「無題」とある。「無題」ということばもある暗示を持つ。世人との交わりを絶つ。人間界から離れた裸の生活、無人島と漱石の心は動く。

この年にあの痛烈シニカルな処女作『吾輩は猫である』が書きはじめられたわけである。

同じ年、虚子と長篇俳体詩「尼」を合作した。

「白露に悟道を問へば朝な夕な」「兀々（こつこつ）として愚なれとよ」と漱石自ら自問自答する場面もある。

〝愚〟という問題、これは漱石にとって大きな意義を持つ。

能もなき教師とならんあら涼し（明治三十六年）

愚かければ独りすずしくおはします（明治三十六年）

其愚には及ぶべからず木瓜の花（明治三十二年）

楽寝昼寝われは物草太郎なり（明治三十六年）

木瓜の花役にも立たぬ実となりぬ（明治三十二年）

初めの一、二句は、六月十七日井上微笑宛の手紙に十三句しるしたその一つである。「無人島の天子とならば涼しかろ」もその際書かれたものといえる。

微笑は熊本の俳人で、本名は藤太郎といった。前年親友子規の死に会い、漱石自身も英国ロンドンで神経衰弱が昂進し、日本では発狂の噂が立った。帰朝後、熊本の第五高等学校を依頼免官、四月第一高等学校の教授に任ぜられたばかりである。その年十一月には、また神経衰弱が昂進する。

「能もなき教師」「愚かければ」は神経過敏、物がよく見えすぎる漱石にとって、むしろ望むべき境地、安住のための人生観であったともいえる。

三句の物草太郎は、『御伽草子』の無精な主人公である。「われは物草太郎なり」といいながら、謹厳実直。そうした人物には成り切れ

九

ない程遠い自分をみる。近代人、知識人として齷齪とせざる得ぬ自分につくづく嫌気がさす。

当時の社会の最高の教養人漱石は、一方で愚の世界、〝愚か〟になり切る境地にひどく憧れていたともいえる。

三句、五句ともに木瓜の花の役立たず、愚かさをむしろ評価する。『草枕』に「世間には拙を守ると屹度木瓜になる。余も木瓜になりたい」とある。その境地に一歩近づかんとする自分を書きとどめる。いずれも春から初夏にかけての手帳にしるされたものである。

かつて「子規の画」について、とても俳句や歌のように無造作にさらさらとできるといった代物(しろもの)でなく、三茎(みくき)の花にも五、六時間の手間をかけ、丹念に塗りあげる。文筆に見られるペン先が絵の具の皿に浸ると同時にたちまち竦(すく)んでしまったかと思われる程であると評して、子規ほど永年交際してきて、人間として、文学者として「拙(せつ)」の欠乏した男はないが、ただこの画だけは、働きのない愚直の旨さ、几帳面な根気強さを実行した点で、〝拙〟の一字が当てはまると。

できればこの〝拙〟の部分をもう少し雄大に俳句や日常生活に発揮させてもらいたかったと、子規没後十年の明治四十四年に子規を偲ぶ一文にしるしている。

拙とか愚は、漱石が〝鋭敏〟、〝利巧〟、〝そつの無さ〟、〝自我〟と相対するものとしての理想化であり、ぜひとも求めていきたかったものの一つである。

しかし、俳句に関していえば、その子規の影響は、漱石にとって非常に大きい。

漱石は句を作ると、これを大抵は巻紙に書き、子規の許へと送っていた。これが明治三十二年までつづき、その都度、その句稿に目を通した子規は添削あるいは、丸や二重丸、点などを付して漱石の所へ送り返していた。

明治二十五年、子規は、俳人としての蕪村を発見し、翌年「実地吟詠」を人に勧め、やがて写生句の説を打ち立ててゆく。これは漱石にも影響を与えている。

明治二十四、五年まで、「聖人の生れ代りか桐の花」「今日よりは誰に見立ん秋の月」「鳴くならば満月になけほとゝぎす」「病む人の炬燵離れて雪見かな」といった、どちらかといえば、月並み、旧派の眼でしか句を作り得なかった漱石が、明治二十七年に入ると、

春雨や寝ながら横に梅を見る

烏帽子着て渡る禰宜(ねぎ)あり春の川

菜の花の中に小川のうねりかな

といった写生句、蕪村調の句も出てくる。

しかも抒情的な味わいも漂う。

近代句への脱皮をなし遂げてゆく。

子規の死とロンドン留学

さて、この親友子規の死にあたって漱石は英国留学中であった。

明治三十四年には、ビクトリア女王の葬儀を見物していくつかの句を作り、ロンドン在留の日本人句会に二度ほど出席したりした。明治三十五年の末には日本へ帰ろうとしている漱石のところへ、九月、子規の死の報らせが舞い込んだ。

十二月一日付虚子宛に「子規追悼の句何かと案じ煩ひ候へども、かく筒袖姿にてビフテキのみ食ひ居候者には容易に俳想なるもの出現仕らず、昨夜ストーヴの傍にて左の駄句を得申候。得たると申すよりは寧ろ無理やりに得さしめたる次第に候へば、只申訳の為の御笑草として御覧に入候。近頃の如く半ば西洋人にて半日本人にては甚だ妙ちきりんなものにて候。」と書き送っている。

筒袖や秋の柩にしたがはず

手向くべき線香もなくて暮の秋

霧黄なる市に動くや影法師

きり〴〵すの音を忍び帰るべし

招かざる薄(すすき)に帰り来る人ぞ

「倫敦にて子規の訃を聞きて」の前書きがある。

漱石の帰国は翌年の一月二十三日である。渡欧からロンドン滞在の句を少し拾ってみると、

阿呆鳥熱き国へぞ参りける（明治三十三年）

稲妻の砕けて青し浪の花　（同年　　）

雲の峰風なき海を渡りけり（同年　　）

吾妹子を夢みる春の夜となりぬ（明治三十四年）

花売に寒し真珠の耳飾　（明治三十五年）

三階に独り寝に行く寒かな（同年　）

句あるべくも花なき国に客となり（同年）

一、二、三句は、いずれも海上での景、心境を詠んだものであり、日記にしるされている。

一句の「阿呆鳥」は、実景であるとともに我が姿でもあったに違いない。ロンドン滞在中の無意義さ、暗い将来をも予測させる。そこへのこ〳〵とたずねゆくわが身の愚かしさでもある。

二、三句からは縹緲たる海原をよく彷彿させるものがある。

四句は妻を恋う、五句では、この花の都ロンドンに花を売る女の貧しさ寒さ、それは真珠の耳飾などをしているゆえに一層さむざむとした哀感が迫ると。花売の心の寒さは、当時の漱石の心の貧しさでもある。

六句、七句で、この頃の漱石には、すでにこの異国での生活は堪え切れぬものがあるとの事実を窺わせる。一級資料といえる。

当時日本の家屋は、せいぜい二階建てである。だがこの地では高層建築は軒並み、三階という日本では考えられぬ豪奢な建物に尻を据えながら、漱石の心は沈むばかりである。ただ寒さばかりが残る。

句はつくってみても、ほんとうにそれを詠みこむ自然の花がない。これほど花のない国とは思わなかった。この花の少ない世界、それは漱石の心に暗い影を落とす。句をつくる気持ちはあってもどうすることもできない。この国に客となる我が身の不運を嘆くばかりである。

明治三十六年七月二日菅虎雄宛の手紙に「発句ナンカ下火極マルマデ作ル気ニナラン然シ退屈凌ギニ時々ヤル是ハ得意ノ余ニ出ルノデハナイ一時ノ鬱散ト云フ資格サ」と書いているが、やがて小説へ向う漱石の転機の時期にも当る。

この頃彼は、「子羊物語に題する十句」と称して、小松武治訳の『沙翁物語集』序に、英文の一節をしるして、そのあとに俳句を書き込んでいった。

同じ年、雑誌『紫苑』の記者の求めに「俳句と外国文学」の題の談話の中で「私は近頃スッカリ俳句を廃めたのですが、これには別に深い理由のあるのでも無いのです。（略）今日も尚俳句に対する面白味を充分に認めて殊に趣味の取捨と云ふことには、俳句から多分の

利益を得て居ると云ふことを信じて疑はないのであります。」といっている。実際、明治三十七、八、九年間の漱石の俳句はいたって少ない。

俳人子規を失った漱石が、俳句への興味を持ちながらも実作者としては急速に離れてゆく。あり得ることである。

大学退官と博士号辞退

明治四十三年以後、また漱石の句は多くなる。

物いはぬ人と生まれて打つ畠か（明治四十年）

田の中に一坪咲いて窓の蓮　（同年　）

僧となって鐘を撞いたら冴返る（明治四十一年）

小袖来て思ひ〳〵の春をせん　（明治四十二年）

四十年四月、いっさいの教職、すなわち、第一高等学校教授、東大講師、明治大学講師これらを辞して、朝日新聞社に入社する。「入社の辞」がある。

大学を辞して朝日新聞にはいつたら逢ふ人がみな驚いた顔をしてゐる。なかにはなぜだと聞くものがある。大決断だと褒めるものがある。（略）然しながら大学のやうな栄誉ある位置を抛つて、新聞屋になつたから驚くといふならば、やめてもらいたい。（略）文芸上の述作を生命とする余にとつてこれほどありがたいことはない。これほど心持のよい待遇はない。これほど名誉な職業はない。

かなりの長文であるが中略すると右のような内容となる。

辛棒すれば、一等二等の高等官、勅任官になる身であり、あえて野に下る漱石には、自分の気ままな、世間の評価云々に煩わされない身の処置を望む気持ちが強かった。文芸の世界、芸術の境に生きることである。『草枕』の書き出しに、「智に働けば角が立つ。情けに棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」とある。

大学を去るにあたっても、「大学で講義をするときは、いつでも犬が吠えて不愉快であつた。」と言っている。「犬」とは具体的に何を指すのか。権力、世俗の栄誉を背景にした大学関係者たちを暗に諷するとも考えられる。「僕の胃病は今年ほどよき年はない。天下の犬

を退治すれば胃病は全快する。これが僕の生涯の事業である。外に願も何もない。いはんや教授をや、いはんや博士をや。」（加計正文宛）

「時があったら神経衰弱論を草して天下の犬であること自覚させてやりたいと思ふ。」（鈴木三重吉宛）と「犬」は漱石が生涯の敵として相対するもの。別称の一つでもあった。

同時に漱石は、こうしたものに関わりたくない。出来得べくんば回避したいとの気持ちも強かった。

「物いはぬ人と生まれて」畑を打つ境涯、田の中に一坪ほど咲く蓮を眺め入り、時には清僧として鐘を撞きその鐘の冴えに聞き入り、あらゆる拘束や上からのお仕着せを離れ、思いおもいに自由に好きな小袖を着て振舞える春の季節等々……。これが漱石の理想の境地でもある。

内閣総理大臣西園寺公望（さいおんじきんもち）が小説家たちを自分の邸に招いた。

総理から招宴されることは名誉であり、作家としても箔が付くというものである。鷗外、露伴、独歩、鏡花、秋声、藤村、花袋など選ばれた十七名は大いに喜び参席する。

招かれて辞退した人が三名いる。

逍遙、四迷、漱石である。

漱石は丁度、『虞美人草』を書き出した途中であったが、

ほととぎす厠半（かわや）ばに出かねたり

の句を示し、やんわりとながらことわった。

作家は作家として、権力、政治の世界とは切り離し、気ままに思いおもい自由にしておいて欲しい。そんな気持ちがあったかと思われる。

明治四十四年の博士号辞退でも同様なことがいえる。

二月二十一日付で漱石の文部省専門学務局長宛の手紙が残る。

拝啓　昨二十日夜十時頃私留守宅（私は目下表記の処に入院中）本日午前十時学位を授与するから出頭しろといふ御通知が参ったさうであります。留守宅のものは今朝電話で主人は病気で出頭しかねる旨お答へして置いたと申して参りました。

学位授与と申すと二、三日前の新聞で承知した通り博士会で小生に授与になることかと存じます。然る処小生は今日までただの夏

目なにがしとして世を渡って参りましたし、これから先もやはりただの夏目なにがしで暮したい希望を持っております。従って私は博士の学位を頂きたくないのであります。この際御迷惑をかけたり御面倒を願ったりするのは不本意でありますが右の次第ゆゑ学位授与の儀は御辞退致したいと思ひます。

よろしくお取計らひ願ひます。

敬具

二月二十一日　　夏目金之助

専門学務局長　福原鐐次郎殿

自由な生活、太平の遊民、天下の逸民として送ろうとする漱石にとっては、博士号は迷惑この上もないという。博士号をおしつける権力は、やがて気に喰わなければ、博士号を奪い取る権力に変貌するというのが漱石の考えである。そうしたものから距離を置き、静かに自由にその身を処したい。これが漱石の願いでもあった。

老荘の思想

死して名なき人のみ住んで梅の花（明治三十三年）

無名であること、生にも死にも注目されることなく名声・権勢にかかわりない身。その境涯にしてはじめて梅の白さ美しさが冴え返り、分かってくるというものである。

それは東洋の思想であり、老荘、哲学の分野でもある。

白梅や易を講ずる蘇東坡服　（明治三十二年）

水仙や髯たくはへて売茶翁　（同年　　）

売茶翁花に隠るゝ身なりけり（大正三年）

良寛にまりをつかさん日永哉（同年　　）

蘇東坡は、中国北宋の詩人、文章家である。名は軾といい、東坡居士と号した。官吏の栄職を避け、田園自然に隠栖した人である。

一五

売茶翁は、老荘思想を人生観として生きた奇人。茶を売って生活とした。仙人ともいうべき人物である。髯をたくわえた売茶翁の風姿に取り合わせるには、清らかな水仙がふさわしいと。

その身についた才能、教養を隠し、この売茶翁は、花の内、自然の中にこっそりと身を隠し、そのうつくしさに身を浸しつゝ生きた。

良寛は越後の生んだ傑僧。この僧も禅を修めながら、その行動、関心はむしろ老子・荘子、とくに荘子にあったようである。終日、村里の子供たちと手毬をつき遊び戯れる。菫を摘み、大事な飯のたねである鉢の子を野原に忘れたりする。歌僧であり、隠栖の詩人僧でもある。歌に「この宮の森の木下に子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし」「子供らと手まりつきつつ此の里に遊ぶ春日はくれずともよし」「霞たつながき春日に子供らと手毬つきつつこの日くらしつ」と世俗を超えた生き方を謳歌した。

老聃（ろうたん）のうとき耳ほる火燵かな（明治三十二年）

老聃は老子のこと。耳がずばぬけて大きかったことからこれを称して老聃ともいう。伝説上の人物であり、それだけにその生き方は遙けく杳然として霞の中に烟る。

大正四年の晩年、武者小路実篤への手紙に「武者小路さん気に入らない事、癪にさはる事、憤慨すべき事は塵芥の如くたくさんあります。それを清めることは人間の力で出来ません。それと戦ふよりもそれをゆるすことが人間として立派なものならば、出来るだけそちらの方の修養をおたがひしたいと思ひますがどうでせう。」（六月十五日付）とある。

死に直面し、やがて“則天去私”に自らを任せ委ねてゆく漱石は、案外自らの究極を、東洋的老荘のあるがまゝの世界に回帰せんとする自分を感じていたのではないか。そこにこそ、西欧近代の個人主義、利己主義に対し、自我の無い、真の安心と立命、静寂境、芸術の到達点があったとも自覚していたに相違ない。

漱石の句は数多い。これまでに挙げた句は、その極く一部分に過ぎない。しかも東洋思想、禅的、老荘思想にしぼってのものである。しかし、これを抜きにしては、やはり真実の漱石を語り得ないような気がしてならない。その方面での俳句を覗いて見た。

漱石の最晩年の句がある。

瓢箪は鳴るか鳴らぬか秋の風（大正五年）

題詞には「瓢箪はどうしました」とある。秋の風に瓢箪は鳴るか鳴らぬかと問うている。

鳴らずともよし、鳴れば風流である。いずれもそれぞれに味わいがある。あるがまゝ、置かれたまゝを肯定しようとする柔軟性、融通性を盛った句である。いわば漱石が達して得た心境であったのかもしれない。十一月十五日付の富沢敬道宛の手紙にみられる五句の内の最後の一句となる。漱石の死は十二月九日だから、死の一ヶ月程前に当る。饅頭を沢山もらった礼状と富沢敬道の詩についての評に書き添えたものである。

「饅頭を沢山ありがたう。みんなで食べました。いやまだ残つてゐます。是からみんなで平らげます。俳句を作りました。」とあって、その後に五句がつづく。前四句をしるすと次のようなものである。

饅頭に礼拝すれば晴れて秋
饅頭は食つたと雁に言伝よ
徳山の故事を思ひ出して
吾心点じ了りぬ正に秋
僧のくれし此饅頭の丸きかな

富沢敬道は、修行中の若い禅僧である。従って句も禅的なものとなったものであろう。「徳山の故事」とは、『碧巌録』第四則本則に「挙す、潙山に到る。複子を挾んで法堂上に於て、東より西に過ぎ、顧視して無無と云つて便ち出づ」とある。

三、四句は「正に秋」または「丸きかな」と澄んだまろやかさが特色となる。それは初句の「饅頭に礼拝すれば晴れて秋」にも、他の句にも気負うところなくさらさらと言い切っている点が共通していた。

十一月十日付で、同様若き禅僧鬼村元成に宛てた手紙に、

まきを割るかはた祖を割るか秋の空

とあるが、禅的な冴えたひびきの木魂する句といえる。

鬼村元成は、先の富沢敬道ともども漱石を尋ねて来た人物である。

一刀両断まきを割るか、はた、仏祖を割るか（感得するか）この秋空はまことに明快透徹した美しさがあるといったものである。

なお、富沢敬道宛の手紙の中で二、三日前に作ったという漢詩を書きやっている。

自笑壺中大夢人

一七

雲寰縹緲忽忘神
三竿旭日紅桃峽
一大珊瑚碧海春
鶴上晴空仙翮静
風吹霊草菜根新
長生未向蓬莱去
不老只当養一真

「壺中大夢人」「雲寰縹緲」「紅桃峽」「鶴」「霊草」「菜根」「長生」「蓬莱」「不老」「養一真」と神仙、老荘に関した東洋的詩語を詠んだ句が多いことに気付く。

仙人の境涯をひたすら求めて、自然の景に我れを忘れ去らんとする詩である。

蝸牛や五月をわたるふきの茎

の九月八日の画賛や、

煮て食ふかはた焼いてくふか春の魚

の十月の画賛。さらには十一月の画賛で、

いたづらに書きたるものを梅とこそ

など、この頃の作には、自在、酒脱なものが多く、俗気と縁を切ったような句風が見られる。

「いたづらに書きたるものを梅とこそ」の句には「春風未到意先刻」とあるから、季節はまだ春に遠くとも、心はすでに梅の匂いを感じ取っていたともいえる。

漱石の句をいろいろあげて来たが、思想的難解な句のみに傾いたむきがある。難解というより理屈っぽく見てしまったというべきかもしれぬ。

しかし、漱石には、いわゆる俳人にはつくれぬ、文人でこそのしみじみとした味わい深い句も多い。

また感覚的にハッと思わせる新鮮な句にも行き当たる。

白魚や美しき子の触れて見る　（明治二十八年）

駅馬つゞく阿蘇街道の若葉かな（明治二十九年）

生き返るわれ嬉しさよ菊の秋　（明治四十三年）

などなどそれに相当するかと思われる。

白魚と美しき子はみずみずしく、普通の俳人が詠み出すには散文的となる点でちょっとためらい、それだけにかえって切角の好材を失う場合があるやもしれぬ。将来作家として生きる漱石は躊躇なくこれを取り上げた。

二句の荷駄馬のつづく旧阿蘇街道の若葉は眼に沁みて痛い程だ。

三句には、「嬉しい。生を九仞に失って命を一簀につなぎ得たるは嬉しい。」との説明がある。

明治四十三年の四十四歳の漱石は、胃潰瘍で大吐血。修善寺温泉で一時生命危篤の状態に陥った。

率直に、飾らず、蘇生の喜びをよろこびとしてこれを句にした。

菊の秋の実感が、素直に読む者の胸の内へと拡がる。

一九